

さいたままで出会う新しいアート

新春対談

今年3年に1度のさいたま国際芸術祭（以下、芸術祭）の開催年です。「わたしたち」をテーマに、10〜12月に市内各所でさまざまな作品が発表されます。ディレクターとしてこのテーマを選び、全体を統括するのが、現代アートチーム目「mé」。その中心メンバー3人と清水市長が、芸術祭の会場の一つである RaiBoC Hall^{レイボックホール}にて意気込みと期待を語り合います。



荒神明香



南川憲二



増井宏文

PROFILE

現代アートチーム 目 [mé]

荒神明香さん／南川憲二さん／増井宏文さん
アーティストの荒神さん、ディレクターの南川さん、構想を形にするインストーラーの増井さんの3人が中心メンバー。手法やジャンルにはこだわらず、展示空間や観客の反応を含めた状況、導線を重視する。

市民参加型のイベント

さいたま市は文化芸術活動が盛んですね。

市長 文学や音楽、美術、芸能、茶道に華道、書道など、さまざまな文化芸術活動をしている市民がたくさんいらっしゃいます。例えば、「市美術展覧会」は毎年700点前後が出品されます。小・中学生を対象にした演奏技術を競う「市ジュニアソロコンテスト」では、毎年およそ500人の児童・生徒が参加しているんですよ。

そういう土壌を活かしてまちづくりをしていこうと、平成24年に「さいたま市文化芸術都市創造条例」を施行しました。この条例に基づいて計画を策定



し、盆栽や漫画、人形、鉄道といった地域に根差した文化を継承しつつ、新しい文化を創造できる都市を作ろうとしています。

芸術祭は、その象徴的な事業と言えます。概ね3年に一度、「生活都市さいたま」を舞台に

南川 今、気候変動や社会格差、分断、戦争など、私たち自身に関わりを抜きに語れない、さまざまな課題があります。そんな

「私」を客観的に見る
 「わたしたち」というテーマには、どんな意味が込められているのでしょうか。

開催していて、今回で3回目です。市民とアーティスト、そして地域が交流する機会を設け、「共につくる、参加する」市民参加型のイベントとして、旧市民会館おみややをメイン会場に市内各所で開催します。全体を統括するディレクターの役割は、公募を経て目「mé」の皆さんにお願いしています。

世界をいかに自分自身のこととして考えることができるか問われています。その問題提起として、「わたしたち」というテーマを提案したんですね。私という主体から一步引いて、私をも少し客観的に見た「わたしたち」を見る。そんな機会を今回の芸術祭で届けたいです。



「皆さんにとって、さいたまはどんな場所でしょうか。」

作品を作りやすい環境

荒神 自然の近くで考えることができる場所がたくさんある、自然豊かなところだと感じます。作品の構想をするときに、川の流れをじっと見たり、広い田んぼの中でぼーっとしたりということ、よくやるんです。そうすると、日々の課題や悩みがふっと消える瞬間があって。

増井 私は、作品を作るのにすごく協力的なまちだと感じています。さいたまトリエンナーレ2016で《Elemental Detection》(P4)という市民参加型の作品を作ったん



さいたま市長
清水 勇人

市文化芸術都市創造条例と市文化芸術都市創造計画

本市は、盆栽、漫画、人形、鉄道をはじめとする文化芸術に関する多彩な地域資源を活かし、「生き生きと心豊かに暮らせる文化芸術都市」を目指して、まちづくりを進めています。条例に基づき策定した計画では、市民を主体としたさまざまな事業に取り組んでいますが、なかでも、「さいたま国際芸術祭」は文化芸術都市創造の象徴的・中核的な事業として位置付けられています。

南川 アートを専門とする方に限らず、おかんがつつかけ履い

です。このとき、市民や事務局、市役所の方々がいろいろなことを手伝い、支えてくださって、創作に全力投球することができました。

市長 あの作品は、すごくインパクトがありました。緑の中をくぐっていくと、沼にしか見えない空間が現れて、でも、その水面を歩くことができるという。とても不思議な体験をしました。目「mé」の皆さんの作品は、出会いが強烈なイメージがあります。そういうのは、意識しているんですか。



て見に行こうと思えるようなものを作ろうと心掛けていますね。

市長 そんな皆さんがディレクターを務める芸術祭はどのようになるのか、非常に楽しみにしています。

新しい目線を得られる場に

— 市民の皆さんに芸術祭をどう楽しんでもらいたいですか。

荒神 アートって聞くと、時々にくいイメージを持たれるかもしれません。でも、常識や言葉が違う外国の人たちの作品であっても、自分とすごく関係して見えてくる、そういう瞬間

があるんですよ。自分と関わりがあるかもしれないという視点で見ることが、アートの一つの楽しみ方なのかな。

増井 作品には、アーティストが世界をどのように捉えているかがギュッと詰まっています。他の人がどのようにこの世界を見ているのか。それをのぞき込むような気持ちで作品を見ると、楽しめるんじゃないでしょうか。

市長 文化芸術が持つ力を使って、教育はもちろん、福祉や産業などさまざまな分野の活性化や発展につなげていきたいと考えています。それだけに、市民の皆さんが文化芸術からさまざまな気づきを得て、それを自分



たちの日常にどう活かしていくか考えるようになることが重要だと思っています。

芸術祭は、そのためのきっかけとなる活動です。会場を訪れることで、びっくりするような出会いがあるはずで、自分の中に眠っている新しい感性や価値観などを発見できるのではないのでしょうか。

荒神 芸術祭をおして、生まれた赤ちゃんや幼い子どものように新鮮な目線でこの世界を見ることができるようになったら、ものすごい可能性につながっていくと思うんです。新しい目線を得られるような場にしていきたいですね。

南川 芸術祭の掲げる「共につくる、参加する」に対する答えを、自分たちなりに考え、発信していくつもりです。市民の皆さんに主体的に見てもらおう、あるいは制作に参加してもらおう状態を作りたいです。鑑賞する人がいないと、芸術は成立しないので、多くの方に見に来ていただきたいですね。

市長 多くの市民の皆さんに参加して楽しんでもらうだけでなく、文化芸術活動を始めるきっかけとなれば幸いです。

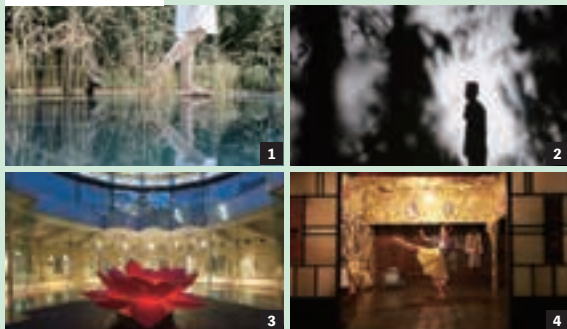
さいたま国際芸術祭のこれまで

目[mé]も参加していました

3回目の開催となる今年のさいたま国際芸術祭。

過去作品を見逃してしまった方のために、一部作品を紹介します。

2016年 テーマ「未来の発見!」



1 目[mé]、《Elemental Detection》、Photo:Natsumi Kinugasa
2 アビチャップン・ウィーラセタクン、《Invisibility》からのフィルムスチール 2016、Photo: Chai Siris
3 チェ・ジョンファ、《息をすする花》、Photo:KUTSUNA Koichiro,Arecibo
4 向井山朋子、《HOME》パフォーマンス、Photo:KITA Naoto

ディレクターは芸術祭監督経験が豊富な芹沢浩志氏。34組のアーティストを招き79日間開催されました。

2020年 テーマ「花/flower」



5 フランク・ブラジガンド、《日常の修復 - 旧大宮区役所》、Photo: 丸尾隆一
6 平川恒太、《太陽の民 顔ハメパネル》、Photo: 丸尾隆一
7 Dama Dam Tal + ひまわり特別支援学校全校生徒《ひまわり〜Improvisation in the park〜》
8 「I can speak - 想像の窓辺から、岬に立つことへ」、久保寛子、《ハイヌウェレの想像》、Photo: 丸尾隆一

ディレクターは映画監督の遠山昇司氏。42組のアーティストを招き、新型コロナの影響により30日間の開催となりました。

さいたま国際芸術祭2023の市民プロジェクト

さいたま国際芸術祭は「共につくる、参加する」という市民参加型の芸術祭。
多様なプログラムのなかでも、どなたでも参加しやすい「市民プロジェクト」を紹介します。

1 創発inさいたま

市内外で活躍する美術家たちと市民活動を行う人々の協働を促し、ギャラリーや美術館、大学との連携など、地域に新たな創発を起こします。

2 さいたまアーツセンター プロジェクト2023* (SACP2023*)

音楽のライブやアート関係者によるレクチャー、実際にアート制作に携わるなど、日常生活のなかでアートに参加する機会を提供します。

3 アーツさいたま・きたまち

会期中、北・大宮区等の商業施設や文化施設を拠点としたアートカー・自転車のキャラバン走行、本市に滞在するアーティストによる作品制作を行います。

4 公募プログラム

公募にて選ばれた市内の文化芸術活動を対象に、広報協力や費用補助など、市内外に発信するためのサポートを行います。

5 応援プロジェクト

芸術祭の開催趣旨に賛同し、2023年のテーマである「わたしたち」を踏まえた文化芸術に関連した事業を認証し、広報の相互協力を行います。

6 市民サポーター事業

芸術祭の運営に携わる市民サポーターを募集し、その活動を支援します。また、文化芸術のネットワークを作り、芸術祭閉幕後もコミュニティの継続・拡大を目指します。

さいたま国際芸術祭では、世界で活躍するアーティストの作品を直近に感じられるだけでなく、自ら参加することができ、誰もがアートにあふれた豊かな暮らしを感じることができます。なかでも市民プロジェクトは、これまで文化芸術活動に取り組んできた方も、これから取り組んでみようという方も、市民が主体となって参加できる6つの機会と場を提供します。



Photo: Shunya.Asami

体験型ワークショップ事業のイメージ



公募プログラムのイメージ

公式Twitter
@art_saitama

公式Facebook

公式Instagram
@artsaitama

今月の表紙

さいたまの
新しい一面を
見つけよう

さいたま国際芸術祭2023開催情報

会期

10月7日(土)～12月10日(日)
[65日間]

テーマ

「わたしたち」

目的

- ① 「さいたま文化」の創造・発信
- ② さいたま文化を支える「人材」の育成
- ③ さいたま文化を活かした「まち」の活性化

会場

メイン会場

旧市民会館おおみや(大宮区下町)

その他会場

レイボックホール RaiBoC Hall(大宮駅東口・大宮門街)
大宮盆栽美術館(北区土呂町)
漫画会館(北区盆栽町)
岩槻人形博物館(岩槻区本町)
鉄道博物館(大宮区大成町)
埼玉県立近代美術館(浦和区常盤)
うらわ美術館(浦和区仲町)
市文化センター(南区根岸) など

詳しくは、(公財)市文化振興事業団 国際芸術祭推進課 (☎ 767・5411【日・月曜日、祝・休日(月曜日が祝・休日の場合はその翌日)を除く】、☎ 767・5351) へ。

さいたま
国際芸術祭
2023